

自然についての準備的考察

大西 昇^{*1}

A note on SHIZEN (nature as it is)

Noboru OHNISHI

The ancient Japanese people felt Shizen intuitively. Their word " ONODUKARA NARU " is the fundamental intuition and the heart of Japanese Thought. The word represents the cooperation of the fundamental Nature and human being. To understand this word, we have no use for the schema of nature-culture. Because there are many Views of Nature as it is in the world.

はじめに

前論文「オノヅカラ ナル」について(註1)の末尾を少々修正加筆し、この小論の序としたい。

自然を超えた存在を認め、最高存在〔便宜的使用〕を超自然(一例として Supernature、God)とする立場と、これに対して、自然を超えた存在を認めず、と言うより、元々そのような発想を欠いていて、自然をいわば最高の存在とする立場では、根本から相違すると見なければならぬのは当然である。しかしこの当然なことが無視されているのではないにしても、問題の困難さもあって、正面からこのことが論じられることは余り見られない。われわれ〔筆者〕†は、「古代日本語ナルの発想と意味内容の分析、さらにはその発想を抽出して論理化する、すなわち《ナルの論理》とでも言うべきものを抽出し外在化する作業」を課題とする古代日本の心性の検討を通して、この問題に直面せざるを得なかった。しかしわれわれにこの問題への十分な用意があると言うことも出来ない。したがって以下は極めて不十分かつ極く初歩的なものであり、準備的な検討に留まっている。

†以下筆者を「われわれ」で、現代人としての我々を「我々」で表記する。

上記の問題を端的に言えば、つまりは「自然」と

どう出会っているか、である。そしてこの「自然」を、ここでは仮に「根源的自然」と呼ぶことにする(註2)。われわれは、古代日本語ナルとオノヅカラの長い間の検討を通して「根源的自然」の問題に辿り着いたのである。すなわち、前記の「自然を最高存在とする立場」の一例と考えられる、「古代日本語に見る世界」を対象として、根源的自然に対する一つの「応答」の心的構造について、細やかな検討を重ねてきた。その結果、一応現時点では、次のような仮説を取るに至った。すなわち、その「世界」の中核は根源的自然に対する直観(根源的直観)の一つの形態であり、それは「オノヅカラナル」である(註3)。

自然を超えた存在を最高存在とする立場は、いわば自然から離陸した度合いが強いことから、人間の眼を自然から引き離して、自然をいわば外から見ること、つまり総体的な形での自然を人間意識の対象にすることを可能にする。その代表的な自然像が Nature であると考えられる。Nature の場合、自然から離れた分だけ「自由」な思考が可能になり、強力な人間主体の意識が発達し、その意識はますます精緻になり理論化が進展する。これと比較すると、後者は環境や状況から自立した思考が発達しにくいと受け取れるところを本質的に持っている。少なくとも古代日本の場合、この線上にあると考えられる。従って前者のような形態の意識の精緻や複雑な理論は見られないにしても、それらを全く欠くと

*1 東京工芸大学工学部基礎教育センター非常勤講師
2005年9月14日 受理

いうのではなく、そこに別種の形態の思考、発想を考えなければならない。

(I) 自然と人為

次のように仮に、若干の古代日本語を二つに分けると、

I類：ナル、オノヅカラ

II類：ツクル、ナス、ミヅカラ

この二群は、現代用語では、自然と人為という区分である、とされるであろう。どのような言語であっても、両者が「完全に」分類可能ということはあり得ず、時には区分があいまいな場合もあるかも知れない。しかしながら、たとえそうであったとしても、古代日本語の場合は、その「あいまい」な場合が「時に」どころでなく、それ以上であることは周知のことである。つまり、よく言われてきたことであるが、例えばナルやツクルやウムなどの語の区別が明確に守られない場合が多いのである。ここに、古代日本語を対象とする場合に、自然と人為という二項理解が疑問視される理由の一つがある。

この問題の検討の前にわれわれにとって肝要な点について、ここで予め簡単に触れておくことが適切であろう。つまり、先の区分で、より肝心なことは、II類はI類に支えられ根拠づけられている、というのが、われわれの前提であり、強調したい点である。この点については後でより詳しく扱うこととした。

さて「自然と人為」に戻ると、この二項理解は我々現代人には親しいものであり、これを離れた発想は親しみにくいと言わなくてはならない。そうであるとするとなおさら、古代日本を対象にした場合は、この自然と人為という発想適用への警戒が強調されねばならない。

先ほど述べた現代人とは、Natural Science と Technology が圧倒的に支配する世界の住人という意味である。ヨーロッパにおいて、主にキリスト教が長い年月をかけて育成した Nature 概念は、とりわけ現代において、その著しい一つの特徴を増幅している。すなわち、自然科学とテクノロジーの主要な特徴の一つとして、《操作》manipulate 概念があげられようが、その発想そのものは Nature 概念に元々含まれていたとしても、現代はそれが極度に増

幅されていると考えられる状況にある。

かつてディルタイは、キリスト教への信仰が失われて行ったとしても、それが長い年月養ってきた「自然への支配感情 Herrschaftsgefühl」は残存している、と述べたが(註4)、その感情は、結局は自然の不自然化(人工加工)を目指すことを《本質》とする、と考えざるを得ない。Nature の操作概念は少なくとも以上の背景を持つている。

文化人類学の原理的な図式 nature-culture は、当然このような Nature 概念の下にある。そしてこの図式の強力な発想が、先ほどから問題にしている「自然と人為」の考え方にも大きな影響を与えていると考えられるのである。あるいは、むしろ現代人の生活意識が、nature-culture として、自然と人為として結晶した、という方が実状に近いかも知れない。

先にも言及した点、すなわち少なくとも古代日本人の心性の世界では自然と人為という図式は不適切などころがある、という点については、これまでも幾つかの拙論で検討してきた課題である。しかし自然と人為ないし作為という二項理解から、我々現代人が脱すること、あるいはその理解を離れて別の理解を取ることは容易ではない。さらには別の表現、図式を提出することはなおさら困難である。

困難ではあるが、われわれの関心は、別の表現、図式を探究することにある。それは、まずは古代日本の心性理解を目指すと同時に、丸山眞男の言う「持続低音」(註5)という現代日本に連なる、いわゆる日本的心性の理解のためでもある。さらには、ヨーロッパ出自の Nature に対して、それとは異なる自然理解の提出を遠い目標とする歩みでもある。

ここではまず、二つの例で、nature-culture について、改めて少々考えてみたい。

(II) 現代語「自然」と nature-culture

先にも述べたように、Nature 概念そのものか(特に図式 nature-culture)、あるいは、その影響を受けている概念(おおむね現代語の「自然」)で、古代日本の事象に対する場合の問題点は、以前から検討を続けてきたわれわれの課題であり、ここでも、先ず「現代語としての自然」の問題、次に nature-culture の図式の検討、をそれぞれ例を取って見ることに

って、それらの問題点を改めて確認したい。後者は、以前拙論「ヤツノカミ」への道（註6）で検討した課題であるが、今改めて検討する理由は、我々現代人が Nature 概念の、言うならば「呪縛」を脱することは非常に困難だからでもある。

（1）蛇

「ここにその妻須勢理毘賣の命、蛇のひれ（比禮）もちてその夫に授けて云らししく、「その蛇咋（く）はむとせば、このひれもちて三たび擧（ふ）りて打ち撥（はら）ひたまへ。」かれ、教のごとくせしかば、蛇おのづからに静まりぬ。」記上巻（註7）

この箇所「おのづから」について、西宮一民氏の注は「この「おのづから」は、自然に、の意ではなく、領巾の呪力によって当然、の意である。」（註8）とする。この注は、問題の所在をはしなくも語っている。この場合の「自然に」には「領巾の呪力によって当然」の意味も含まれている、というところが他ならぬオノヅカラなのである。つまり、しばらく西宮氏の土俵を借りると、オノヅカラという古代日本語には、「領巾の呪力によって当然」の意味も含まれている、と一応言えるのであり、この場合、オノヅカラを言い換えた「自然に」は、そのような契機をも含んでいるというところが肝心である。西宮氏は承知されていたかも知れないが、氏が使われた「自然に」には、Nature の内容が混入していて、むしろそちらに近い意味を持っており、これに対して、オノヅカラは *naturally* とは遠いところにある。（ただし「領巾の呪力云々」は、西宮氏を引用したことからの、ここでの一時的使用であり、これらの概念自体、再検討されるべきものと考えて。）

さらに、オノヅカラは単なる「ひとりでに」ではないことも指摘されねばならないが、この問題は（V）で少々検討する。

（2）ヤツノカミ

次に、文化人類学の *nature-culture* の図式を古代日本に適用した場合、どのような問題があるかを改めて見ることにしたい。少々長くなるが、常陸國風土記 行方郡の条を引く。

「古老のいへらく、石村の玉穂の宮に大八洲馱（しろ）しめしし天皇のみ世、人あり。箭括（やはず）の氏の麻多智、郡より西の谷の葦原を截（きり）はら）ひ、墾闢（ひら）きて新に田に治（は）りき。此の時、夜刀（やつ）の神、相群れ引率て、ことごとくに到來たり、かにかくに防障（さ）へて、耕佃（たつく）らしむることなし。

俗（くにひと）いはく、蛇（へみ）を謂ひて夜刀の神と爲す。其の形は、蛇の身にして頭に角あり。ひきゐてわざはひを免るる時、見る人あらば、家門をほろぼし、子孫繼がず。凡て、此の郡のかたはらの郊原（のはら）にいと多に住めり。

是に、麻多智、大きに怒の情を起こし、甲鎧をつけて、みづから仗を執り、打殺し駈逐らひき。乃ち、山口に至り、標（しるし）のつゑを堺の堀にたて、夜刀の神に告げていひしく、「此より上は神の地と爲すことを聽（ゆる）さむ。此より下は人の田と作すべし。今より後、吾、神の祝（はふり）と爲りて、永代に敬ひ祭らむ。糞はくは、な崇りそ、な恨みそ」といひて、社を設けて、初めて祭りき、といへり。即ち、また、耕田（つくりだ）一十町餘をおこして、麻多智の子孫、相承けて祭を致し、今に至るまで絶えず。」

ここでは、以前の拙論と同じく、山口昌男氏による文化人類学の立場からの分析例をあげる。（註9）（ただし山口氏とわれわれでは関心のあり方が異なっているので、われわれの引用は非常に「一方的」である。）

一方で郊原＝蛇＝夜刀の神と表現されている自然＝混沌と、もう一方で田に代表される文化＝秩序とに分類され、麻多智は両者の仲介として意味づけられる。混沌は反秩序、反文化とされ、夜刀の神は、村落共同体の秩序に対してその秩序を犯すもの、例えば村落の周囲の原野を意味しており、つまりは人間が打ち勝ち難い自然の力として分析される。

以上は山口氏による分析の、われわれの関心からする極めて簡単な（かつ一面的な）概略であるが、それは、土着の人々が崇めているカミ、すなわち《郊原》に住み付いている多数の蛇が、開墾の障害となり、里を離れた奥へ追いやられた。こうして人間の支配地が増大していく。このように見做して分析し、これを、蛇（自然）と人間・開墾・農業（文化）と

いう図式で構造分析したものの一例と考えられる。こうして人類は自然を開墾（culture 文化）して人間世界を築きあげてきた、というのが現代人の常識であるかも知れない。この分析の関心とわれわれとは異なることから当然であろうが、この分析は、ヤツノカミを崇めていた人々の心には全く触れていないに等しいと思われる。ヤツノカミを崇めていた人々の心を中心に据えて考えていくと、「文化」の一員であるはずの「農業」が、古代日本ではナリハヒと言われていた一例からだけでも、あの分析では漏れ落ちてしまう点があることが知られよう。

山口氏は日本語で書かれているのであるから当然であるが、自然という現代日本語を使用されている。この用語「自然」の実態は Nature であり、「文化」は culture である。しかし、ここでは、この nature-culture の図式についての詳細を検討する余裕がなく、われわれのこの図式に対する理解を結論的に述べることにする。

nature-culture の図式は、特に操作 manipulate という発想を内包していると理解できる。自然への操作は、自然を《対象》と見做すことが一つの前提作業となろう。山口氏の分析でも、「混沌から身を引き離れた瞬間に、彼は混沌を対象化する。」と述べられていて、山口氏の文脈では混沌は自然を意味している。（註 10）

操作概念は機能概念と通底する。詳細は省略せざるを得ないが、事実、山口氏の分析は、カミにしる人々の信仰にしる、機能（function）という面から評価され分析されていて、どう機能しているかに主な関心があるように見える。その意味でこの図式は、一種の関数（function）の形態と見做せよう。極く単純化すると、 $y = f(x)$ において、 $Y = f(X') = f(X'')$ である場合、この図式では、 Y の方が注目されて、 X' と X'' の相違は無視されるに近い。しかし、人々の信仰を対象にする場合は、両者の具体的姿を無視することには肝要な点を見失う危険性がある、と言わなければならない。もっとも、内的なもの自体は不可知で、外的観察のみ可能であるとする立場であれば、われわれの主張は問題外であろう。

以上、nature-culture の図式でこの風土記の一節を見た場合、つまり Nature という「眼鏡」で見た場合、われわれの関心からすると、古風土記の世界と

言うより、図式自体を見ているに近いと思われるのである。それは、古風土記の世界は Nature に比較して、より根源的自然への直観に近いところにあると考えられるからである。古代文献にあっても、既に根源的自然の直観そのものではなく、「反省」が加わって、二次的に近い表現（次節Ⅲで言及するように、「アシカビの如く」におけるゴトクは二次的である）になっていることは否めないにしても、それは言えることである。つまり、古風土記の世界には Nature は存在しない、と見なければならぬ。また、別の面から見れば、Nature は自分の刻印をその対象（この場合は古風土記）に刻みつけるほど強力である、と言えよう。

（Ⅲ） オノヅカラナル

「はじめに」で述べた意味における最高存在としての自然、つまり根源的自然は当然「定義不可能」である、としなければならない。そうすると、この定義不可能な自然に対して古代日本人はどう答えたか、が問われよう。結論を先に言えば、根源的自然をオノヅカラナルと直観した、という仮説にわれわれは立っている。しかしながら、古代日本人はそのオノヅカラナルを概念化しなかつただけでなく、名付けもしなかつた。それは存在直観とでも言うべきものであり、さらには、彼等にとって究極的なものへの「信頼」でもあり、一種の「信仰」と呼べるものであった。古代日本人は、オノヅカラナル働きとオノヅカラナルモノへ、畏敬と信頼のこころを持っていたと推察されるのである。従ってオノヅカラには宗教性を見ることができると言わなくてはならない。それは Supernature とは異なる超越性ではあるが、人間の能力をはるかに超えたものに対する直観と考えられる。しかしながら仮に究極者というもの想定すると、古代日本人は究極者をカミとは捉えず、究極者はいわば無名であった。すなわち古代日本人は、その「究極」を直接言葉で差し示さなかつたのである。

以前の拙論では次のように述べた。

「ナル（ハタラキ）をとりわけ強く意識して表現したものがオノヅカラという言葉であり表現であり、さらには、ナルハタラキに対する驚異、崇敬、

信頼、希求の表現がオノヅカラである、と仮に理解すると、ナルは本来的にはオノヅカラ ナルである。」(註11)

「このオノヅカラナルハタラキを端的に表現した一例は、かつて丸山眞男も言及した次の古事記の周知の一節である。

「葦牙(あしかび)如く萌(も)え騰(あが)る物に因(よ)りて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲(うましあしかびひこちの)神」記上」(註12)

拙論で考察したように、この「如く」は二次的な理解・表現と考えられ、本来はアシカビそのものであったと思われる。(註13)

このように見てくると、例えば、有名な

石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりけるかも

という志貴皇子の歌にしても、原初のアシカビに通うものがあると考えられてくる。

さらには、草木言語詞章(註14)と呼べるような一節が古代文献に散在するが、例えば次のようなものである。

「古老のいへらく、天地の權輿(はじめ)、草木言語(ことど)ひし時、天より降り來し神、み名は普都大神(ふつのおほかみ)と稱す」常陸國風土記 信太郎

このような「アシカビ」「さわらび」「草木」などは、本来オノヅカラナルモノであり、オノヅカラナル働きの顕れであって、これらの詞章には根源的直観のいわば断片とでも言えるものがうかがえる、と見ることも可能であろう。

さらに言えば、原理としては、すべてのモノはオノヅカラナルモノである、としなければならない。カミ(註15)も山河国土も草木も、そして人間でもある(ヒトトナリ)。すべてはナルという相で受け取られた、と考えられるのである。決してアルという相ではない。あるいはアルがナルという相で見られた、と言ってもよい。

ただしここで注意すべきは、例えばオノヅカラナル働きの対する理解として、「自然の生成力」など

の規定には問題があることである。それは先に述べたように、オノヅカラナルは根源的自然への直観として根源的であると考えられるからである。すなわち、再三の繰り返しになるが、古代日本の事象に対して、安易に現代語としての自然の語を使用することには問題があると言わなければならない。以上からすると、極く普通に使用されている、「自然観」「自然的」などの用語も考え直さなければならない点を持っていよう。それらが不十分なし不適切な理由の一つは、現代の思惟では、それらは、幾つかの複数項の内の一つの項を意味しかねないが、ことは根源に関わる事柄であるからである。そこで、以上の点について少々次節で触れることにしたい。

(IV) 余白構造

根源的直観は、先ず次のような二つの形態を取って、記紀など古代文献に顕れている、と考えられる

(1) ツクルからナルへの移行

(2) カミのウラナヒ

以上の二つの事例にうかがうことのできる古代日本の心性の構造を、われわれは「余白構造」と名付けた。(註16)

先ず(1)の「ツクル→ナル」は、古文書の用例と字訓の二つの面から検討したものであるが、それは、ツクルで始まりながらナルで終わる、という表現の例が少なからず見られることと、同一字がナルともツクルとも訓まれる例などがあるということである。

次の例は、いわゆる神武東征の折、大和平野に進軍しようとする時のものである。

「天皇、又因りて祈(うけ)ひて曰く、「吾今當に八十平瓮を以て、水無しに飴(たがね)を造らむ。飴成らば、吾必ず鋒刃の威を仮らずして坐ながら天下を平けむ」とのたまふ。乃ち飴を造りたまふ。飴即ち自づからに成りぬ。」神武天皇即位前記

この例では、大筋でツクル+意志の助動詞ム→ナルとなっているが、「ウケヒ」の場でのツクル→ナルである。神武の意志とその能力で(ツクル)、飴

が出来る、と受け取るには少々無理があり、それよりは、ひたすら飴がナツタと言うに近いように表現されている。それも戦闘行為という意志が最高に発揮されると予想される場面での表現である。さらに、ウケヒの面から見ると、ウケヒを、仮に神意を問う事と理解すると、全体は神の意志を問うこと、つまりは「神の意志」の上に成立していることを示している。これは次項のカミのウケヒに関連することであるが、ここでのカミは多く何のカミであるのか不明である。

また、

「盟酒（うけひざけ）を醸まむとして、田七町を作るに、七日七夜の間、稲、成熟（な）り竟（を）へき。」播磨國風土記 託賀郡

「多弓命（たてのみこと）、三野より避りて久慈に遷り、機殿を造（つく）り立てて、初めて織りき。其の織れる服は、自（おのづか）ら衣裳と成りて、更に裁ち縫ふことなく、内幡（うつはた）と謂ふ。」常陸國風土記 久慈郡

「織る」を「作る」の一類と見れば、これもツクル→ナルの一例である。

字訓の例は詳細は以前の拙論に譲り（註17）、次の指摘のみにしたい。

記紀風万の四つの古代文献において、ナルともツクルとも訓まれている字をあげると、

成、作、造、爲、經、耕

の六字である。とりわけ成と作の二つが、さらに「農業」に関連する耕の字も注目される。

以上から次のようなことが考えられる。すなわち、人間のツクルという意志的行為が最後まで遂行される、とは意識されていない場合があり、その場合、原理的にツクルはナルを必要としている、つまりツクルには「ツクルの支配圏外」が始めからあるということである。原理的には、ツクルはナルを、不足分を補うものとして必要としていたのではなく、ナルはより根源的な契機として、ツクルやナスなどの有意志の働きを可能にするものと発想されていた、と考えられるのである。以上のツクルとナルとの関係には、人間は十全な意志の所有者ではないこと、すなわち古代日本人の意志のかたちが

示されていて、以上は、古代日本語ナルとツクルの関係構造に「余白」を認めることが出来ることを語っている。そしてその余白はナルが可能にしている、と考えられるのである。さらには、この余白は意識の余白とも考えられ、原則として意識に空白部分を許し、残しておく、ということの意味する。それは、事象に対して、概念的に明確にあくまで接近するという事態にはなり難いことを語っている。概念的よりも心情的に接近ということが起こり易いと言えるであろう。（Ⅲ）で述べたように、古代日本人はオノヅカラナルを概念化しなかったし、「究極者」も無名である。さらには、現代日本語の自然にあたる古代日本語が存在しないことも付け加えなければならぬ。

また、以上のことは《表現》も十全を必ずしも目指さない、ということ語っている。このことは詳細綿密な検討を要する非常に重要な課題であるが、ここではそれが、オノヅカラナルにも関連するという指摘に留めたい。

次は「カミのウラナヒ」であるが、

イザナキ・イザナミ二神のカミウミ、クニウミの条で、

「是に二柱の神、議りて云ひけらく、「今吾が生める子良からず。猶天つ神の御所に白すべし。」といひて、即ち共に參上りて、天つ神の命を請ひき。爾に天つ神の命以ちて、ふとまにうらなひて、詔りたまひしく・・・」古事記上巻

ここでは、二神はいわば自己決済せずに、天つ神の命を請い、さらにはその天つ神はフトマニにウラナフ。

次の例はウケヒである。

根の國に追放されるスサノヲノミコトとこれを迎える天照大神の件で、

「おのおのもうけひて子生まむ」・・・吹き棄つる気吹の狭霧に成りませる神の御名は、多紀理毘売の命。」古事記 上巻

これもウケヒ+（ウム+〔意志の助動詞〕ム）→ナルであるが、天照大神は神意を問うていることになる。

以上の二例は、イザナキ・イザナミ二神に意志を請われた天つ神はフトマニにウラナヒ、天照大神とスサノヲはウケフ、ということで、どちらも「不明

の神」の意志を問うていること、と解釈できる。先にツクルからナルの例で検討した神武天皇即位前紀の条も、そこで言及したようにウケヒの上に成立して、意志を問われた神は不明であった。(この点に関しては、つとに和辻哲郎が指摘し、「不定の神」としている。) (註 18)

以上からすると、カミの計画書(意志)には書かれていない空白部分のある場合があり、それはカミの意志遂行の不完全性つまり意志の部分的放棄を語る。すなわち日本のカミは十全な意志の所有者ではない。これは日本古代のカミの「意志のかたち」である。その空白部分を「余白」と呼ぶことにすると、ここにも余白構造を見ることができる。それはやがて古代日本人の意志のかたちである。

(V) ナルとツクルの図式

以上の観点からナルとツクルの関係を図式化するが、それはまた余白構造の、さらにオノヅカラナルの図式である。

- (A)
- (a) ツクル (α) +ナル (β) =全過程
-
- (b) ナル (α) =全過程

まず、このナルβが「余白」である。ツクルαは、一応、人間の意志による働きであり、ナルβはその人間の意志の範囲外を意味する。ナルαは、ツクルとナルの全過程をその様な構造で可能にするものとしてのナルである。そうすると、ナルαとナルβは同じオノヅカラナル働きの異なる観点から見たものと考えられる。以上、この図式(A)を基本型とする。

さらに以前の拙論で、この基本型をいわば「利用」して、別の局面(隠れた意図・意志の混入)を見せる場合を論じたが、ここでは、余白構造の基本の理解ということから、この基本型を視点を少し変えて異なる表現を取ってみたい。

- (B)
- (a) 人間 + 自然
-
- (b) 根源的自然
- (C)
- (a) 人間 + カミ
-
- (b) オノヅカラナル
- (D)
- (a) 人間 + 余白
-
- (b) 余白

- (E)
- (a) 意志 + 余白
-
- (b) オノヅカラナル(意志)

以上の図式のそれぞれについて説明が必要であるが、ここでは割愛する。ただ、最後のEについて少々触れると、意志の二重性ということが言えるかも知れない。

aの人間の意志に対して、bのいわばオノヅカラナル働きの意志とでも言うものを考えると、aはbに添おうとする・願う、すなわち、aはbと一致することを理想とする場合が考えられる。そのためにはツクルαは自己を否定しなければならない。「作る」が「作らない」(後節VIの註 19 参照)。

- つまり
- (E')
- 人間の意志
-
- オノヅカラナルの意志

- (E'')
- 意志
-
- オノヅカラナル

以上からすると、ナルの余白構造がいわば二階建て(地階と一階の形態の二階建て)になっている、と言えるであろう。ツクル主体の外部から見ると、

ツクルで終了しない可能性を常に秘めていることから、時に平屋に見えていたものに地階があった、ということもあろう。例えば、それはホソネを隠していた、と受け取られることもあろうが、逆にその構造を意図的に利用する場合もあろう。言うまでもないがこの特殊な二階建ての基本は地階である。その意味では、ツクルそのものが二階建てとも言える（以下の稲作の項参照）。つまりナル α が全過程を支えている構造は、そのナル α が常にあらわであるとは限らないことからすれば、地階を隠した平屋に見えるのは当然であろう。

以上では図式の説明としては極めて不十分であるが、ここで、これまでの叙述と重複を厭わず、主にナルとツクルについての問題点のいくつかを挙げることにしたい。

まず、以上のような説明では、単にツクル行為がある所までなされてその後はナル働きに任ず、とのみ受け取られる恐れがあるが、そのような場合だけに限らず、ツクル行為が全過程に存在する場合もあり得ることに注意したい。

例えば、ここでは次のような例を考えてみる。

田ツクル→稲ナル

その実例として先にも引用した播磨國風土記の一節を再びあげる。

「盟酒（うけひざげ）を醸まむとして、田七町を作るに、七日七夜の間、稲、成熟（な）り竟（を）へき。」

また、ナリハヒと訓まれている字例は、農、耕、農業、作田、農作、生業、稼穡、耕種、稼である。これも非常に興味深い。

この「田ツクル→稲ナル」というナリハヒ（農業・生業）の全過程には、当然終始一貫して「作為（ツクル）」（稲作という農業行為）が存在する。この過程で最大の関心事は、これも当然であるが、稲が実り収穫することである。稲の収穫のためには、人間の側からは、全過程において最大限の努力がなされるであろう。したがって、ここではツクルの質が異なる、と見なければならぬ。これを図式にすると次のようなことになろうか。

(F)

(a) ツクル

(b) ナル

まず第一に、全過程におけるツクルの結果はナル（稲ナル）と受け取られているが、それだけでなく、全過程をもナルと感受している（ナリハヒ）、と理解できる。

従って、ナルの本来はオノヅカラナルであるとの前提に立つと、オノヅカラは単なる「ひとりでない」「人間の関与なしに」ではないことが分かる。そしてこの稲作の全過程（ナリハヒ）の本来は、オノヅカラナル働きへの「信」によって生きられた、と考えられるのである。（確かにオノヅカラが一見、「ひとりでない」と受け取れるような例もあるが、それも単純にそのように理解して良いかは疑問である。詳細はここでは割愛する。）

ここでもう一つ補足すると、以上の例からでも、ナルはスルの否定つまり「シナイ」とは限らないことが明らかであろう。つまりツクルとナルはここでは両立している。

さらにナルとツクルの関係について極く簡単に補足すると、オノヅカラナル働きに対する「信頼」「信」ないし「理想」が弱体化していくに連れて、当然ナルからツクルが離れて行き、ミヅカラ（のみ）がツクルという意識を増幅していくであろう。このような段階では、人間の側から「のみ」の意図つまり *manipulate* が入り込む可能性がある。従って以上から明らかなように、このオノヅカラナル世界では、*Nature* に見られたような操作という発想は本来ではない。

一応の総括をすると、ナルとツクルは、(I) で言及した自然と人為ないし作為という二項には、妥当しない点については再三触れたところである。作為でない契機（ナル）に支えられている作為。しかしながら、それではこの「作為（ツクル）」を何と命名するか、という問いに答えるだけでも、非常に困難である。例えば「半作為」と命名しても不十分である。先にも簡単に触れたように、*Natural Science* と *Technology* の圧倒的な影響を受けている現代人、すなわち古代日本人の後裔である現代日本人にとっては、自然と人為の方が理解しやすいと言わねば

ならない。しかし、かつて丸山眞男が「持続低音」を語ったように、われわれもこのオノヅカラナルが古代以後、その根源性を言わば薄めつつも存続していると考ええる。すなわち、それは我々の心性の原型を形成した契機の一つと考えられるのであり、そうでなければ根源とは言えないであろう。

(VI) 自然と自然

余白構造は古代文献を資料とする仮説であるが、前節の末尾で述べたように、われわれは、それが根源に関わる事象であるが故に、古代以後にも深く関係してきたと考えている。さらに言えば現在にも機能している、とも考えている。この点では、かつて丸山眞男が「持続低音」と呼んだものを別の観点から見たものと言えなくもない。われわれは資料を古代日本の文献に取ったが、関心は以上の線上にあり、未成熟な図式ではあるが、ナルないしオノヅカラナルの余白構造という図式は、古代以降の若干の事象の理解にも有効ではないか、と考えている。ただ、全過程をオノヅカラナル働きが支えているのであるから、余白という表現は適切ではないかも知れない。今後の検討点の一つである。

上に述べた「古代以降の若干の事象」の一例として、芸術製作における一つの著しい傾向を挙げてみたい。ただし以下の例が、すべて余白構造のみからくる、と主張するものではない。

それはよく言われることであるが、芸術作品の未完成性、不完全性とでも呼べる点である。例えば、山本健吉によると、

「日本のある種の藝術家たちは、「作り出す」ことに心を尽くした果てに、人間の力の限界に突き当たり、あとは自分よりもはるかに大きな力を持つ自然の手に、自分の作り出したものを委ねようとする。・・・中略・・・それは「作る」という域を越えて、「作らない」という境に至り着くことを理想としている。「作らない」とは、自然と同化するというので、それは人工と自然との境界を「まぎらかす」ということである。」(註 19) とされる。

この山本健吉の見解と次のゲーテの芸術観を対比すると興味深い。

「芸術家 Künstler は世界に向かって完璧なもの ein Ganze を通して語ろうとするが、しかしこの完璧なもの自然 Natur の中には見い出すことができない。」(註 20)

両者の「自然概念」(自然と Natur) が全く異質であることは明らかであろう。

既論文でも触れたことであるが、この余白は否定的な面をも持っている、と言うよりそのような面を可能にする構造である。根源から離れる可能性は常にある。例えば、作為を隠す偽装、関与を隠蔽する「ごまかし」「不在証明」「無責任」、いわゆる「御神輿」体制、などなど、ここでは詳細は割愛せざるを得ないが、この側面からの検討も必要である。「余白」のプラス面、マイナス面、両面からの検討自覚は我々の課題である。しかしながら、否定的に働く場合があるとしても、根源性が失われることはない(持続低音)。

また、Nature (Natur) 概念に言及したが、それは詳細精密かつ慎重な検討と資料を要する、我々現代人に不可避の課題であり、一人のよくするところではない。ここでは、われわれの関心に限定された、片寄りを持った粗雑な検討であると言わなければならない。ただここで一つ未熟な提案をすると、cultures が言われているのであるから、Natures も認められなければならない、と考えるものである。

また、われわれは、Nature 概念に対して、その限界ないし負の面を補うものとして日本の自然概念を提出しよう、というような類の安易なことを意図しているのではない。問題は根源に関しているのである。我々の眼は根源に向かわなければならない。そのような視野から、Nature 概念にしる日本の「自然」概念にしる、根源を掘るといふ志を我々現代人は持つべきである。

さらに、日本語の「自然だ」「自然な」「自然に」などには、日本人の宗教性が現れていると考えられる。それは遠くオノヅカラナルに繋がっているからである。オノヅカラナルは宗教性を持っていると考えられるが、ここではそれを提起するに留める。

最後に、このナルとツクルの図式の考察に当たって、nature-culture との比較を試みてきたことから、後者に対応する図式名を提出することも必要かも知れない。そこで如何に未成熟であっても、一応の

臨時の図式名を案じてみるしかないが、ここでは「自然と自然」に留めておきたい。

【註】

記紀風万の文献は、主として岩波古典文学大系本に依る。それは、国文学研究資料館が大系本をデジタル化したものをも利用したからである。引用の仕方は、訓読本文を主とする。原本の訓を（）内に記す。

国文学研究資料館：<http://www.nijl.ac.jp/index.html>
kokin@nijl.ac.jp

- (1) 「「オノヅカラ ナル」について」『東京工芸大学工学部紀要』人文社会編 Vol.26 No.2、2003
- (2) 同前拙論の註 32 [木村敏氏は、日常的な意味の「自然さ」「不自然さ」がその一様態であるような「根源的自然さ」を言われる。ただし「根源的自然」の語は使用されていない。『自分ということ』1983 p.18f、レグルス文庫]
- (3) 拙論 「「自然物」について」9節参照、『東京工芸大学工学部紀要』人文社会編 Vol.24 No.2、2001
- (4) W.Dilthey, *Das Erlebnis und die Dichtung*, 1910, Vandenhoeck & Ruprecht, s.295
- (5) 丸山眞男 「歴史意識の『古層』」1972 筑摩書房日本の思想6所収（丸山眞男集第十巻所収）など
- (6) 「「ヤツノカミ」への道」1979 『フィロソフィア』67号
- (7) 訓はこの部分のみ西宮一民校注 新潮古典集成本 昭和54年による。
- (8) 同前、p.63
- (9) 山口昌男 『文化と両義性』第一章 「古風土記における「文化」と「自然」、昭和50年、岩波書店
- (10) 同前、p.1
- (11) 「古代日本の神「ナル カミ」について」の6節、『東京工芸大学工学部紀要』人文社会編 Vol.23 No.2、2000
- (12) 拙論 「「自然物」について」7節
- (13) 同前 7節参照
- (14) 拙論 「「草木言語」伝承考」1985.6 『宗教研究』264号 参照

- (15) 詳細は拙論「古代日本の神「ナル カミ」について」同前 Vol.23 No.2、2000 を見られたい。
- (16) 同前
- (17) 同前
- (18) 和辻哲郎 『日本倫理思想史 上』 第一篇第二章 全集 12
- (19) 山本健吉 『いのちとかたち』 昭和56年、山本健吉全集 第四巻所収 講談社、p.225f
- (20) Eckermann, *Gespräche mit Goethe* III, 1827.4.18